

# フィールドホッケー部員のポジションと性格特性

安達 悠子<sup>1</sup>・宮内 絢子<sup>1</sup>注1

(<sup>1</sup> 東海学院大学)

## 要 約

フィールドホッケー部員を対象に、ポジションおよび性別で性格特性が異なるかを検討することを目的にした。ポジションはゴールキーパー (GK)、ディフェンス (DF)、ミッドフィールダー (MF)、フォワード (FW) の4つを取り上げ、性格特性は Big Five 尺度 (和田, 1996) で外向性、神経症傾向、開放性、誠実性、調和性の5因子を測定した。国内大会シーズンに11の大学でフィールドホッケー部に所属する大学生男女154名から有効回答を得た。現在のポジションと希望するポジションを尋ね、それぞれでポジションと性格特性との関連を検討した。その結果、部員は大学生一般と比較して外向性と誠実性が共に高いことが示された。そして、現在のポジションについては外向性、神経症傾向、開放性、調和性にはポジションによる差は見られず、誠実性がMFはFWに比べて高いことが示された。希望するポジションについては、GKにおいては女性が男性よりも神経症傾向が低いことが示された。これらから部員は外向性の高さや誠実性の高さの特徴的に見られ、特にMFに向いている性格特性の一つに誠実性の高さが挙げられる可能性と女性ではGKに向いている性格特性の一つに神経症傾向の低さが挙げられる可能性が示唆された。

キーワード：性格特性、ポジション、フィールドホッケー

## はじめに

### スポーツ心理学の動向

スポーツ心理学は他の心理学領域に比べると歴史が浅く、スポーツ心理学で古典とされる「Psychology of Coaching」や「Psychology and Athletics」と題する本が1926年に米国で出版され、日本においても「運動心理」や「体育運動心理」が書籍として1923年に発刊された1920年代がその草創期と言える(徳永, 2004)。学会として組織的な研究活動が開始されたのは1960年代で、代表的な出来事としては1967年に北米スポーツ心理学会が設立したこと、1960年に日本体育学会に体育心理専門分科会が設けられて1973年には日本スポーツ心理学会が設立したといったことが挙げられる。

こうしたなかで性格とスポーツとの関係は初期から研究で興味の対象にされた。例えば、アスリートの性格の特徴への関心からアスリートの性格特性を非アスリートの性格特性や全国平均と比較したり(e.g., Eysenck, Nias & Cox, 1982; 牧垣・丹羽・長沢, 1982)、アスリートとしての心理学的な適性に対する興味から成績優秀者と成績非優良者との比較が行われたりした(e.g., Garland & Barry, 1990; 丸山・井篁, 2014)。また種目間での性格特性の比較などもされてきた(e.g., Schurr, Ashley & Joy, 1977; 牧垣ら, 1982; 丸山・井篁, 2014)。

近年は、メンタルヘルスに対する関心の高まりからアスリートと非アスリートとの性格特性の差異が再度捉え直されたり、アスリートの性格特性がメンタルトレーニングに絡めた観点から解釈されたりしている。そして、ポジションの心理的適性に関する研究は選手を活かしたチームのマネジメントに役立つ可能性から、いくつかの研究が報告されている。

### ポジションと性格特性

性格特性の理論は人をタイプにわけける類型論と人の性格を複数の側面から捉える特性論がある。スポーツ心理学における性格特性の検討では、初期を中心に競技あるいは競技監督の経験者が類型論に基づいてあるいは独自に性格を類型化する場合が散見されたが、現在の性格特性の理論では特性論が優勢である。そこで、ここでは特性論を前提とした性格特性尺度を用いてポジションと性格特性との関連を検討した先行研究に注目し、出版年が新しい順に表1にまとめた。

使用尺度は様々であった。エゴグラムやY-G性格検査などはスポーツ心理学に関わらず性格の測定に広く使用されている尺度で、DIPCA.3や改訂版TSPIなどはスポーツ選手を対象に作成された尺度である。このようにスポーツ心理学で性格特性を測定する際には特定の一つの尺度が最も頻繁に使われる実態はなく、研究目的に沿っ

# フィールドホッケー部員のポジションと性格特性

表 1 ポジションと性格特性に関する先行研究

出典	使用尺度	対象者	種目	ポジション(区分数と内訳)	主たる結果	備考
大久保・永野(2014)	エゴグラム <sup>1)</sup>	高校生大学生女子 119名	バレーボール	5 レフト, センター, ライト, セッター, リベロ	A(大人)はリベロ(レシーブ専門で最後部から陣形を微調整する)が最も高く、センター(攻撃やおとりを担う)が最も低い FC(自由な子ども)はセッター(チームの司令塔)が最も高く、リベロが最も低い	
Cavala, Trninic, Jasic & Tomljanovic (2013)	アイゼンク性格検査 <sup>2)</sup>	ジュニア(約15歳)女 子70名	ハンドボール	4 ゴールキーパー, アウトサイドプレーヤー, ウィング, ビボット	外向性はゴールキーパーが低い	
川上・高橋・榎本・下川(2009)	DIPCA.3 <sup>3)</sup>	ジュニア(17,18歳)男 子54名	水球	3 センタープレイヤー, アウトサイドプレイヤー, ゴールキーパー	忍耐性はゴールキーパーがセンタープレイヤーやアウトサイドプレイヤーより高い	
藤谷・谷田部・関・河野・青木(2005)	Y-G性格検査 <sup>4)</sup>	大学生45名 (おそらく男子のみ)	アメリカンフットボール	7 攻撃陣(OL, QB, WR, RB)と守備(DL, LB, DB)	E型(消極, 不安定型)が守備陣に7名で攻撃陣に1名と守備陣に多い 性格因子にはポジション差なし	性格型は統計検定なし
杉山(1997)	MPI <sup>5)</sup>	大学生男女163名	不特定(ニュートラルなポジション図を使用)	9 前列(左, 中央, 右)と中列(左, 中央, 右)と後列(左, 中央, 右)	前方の列を選ぶ人ほど外向性が強い	
徳永・橋本・高柳・許斐(1994)	DIPCA.1	大学生511名 (おそらく男子のみ)	準硬式野球	5 投手, 捕手, 内野手, 外野手, その他	自己実現は投手や捕手が高く, 内野手や外野手は低い 他の因子(闘争心等)ではポジション差なし	多重比較の結果が未記載
西村・田中(1986)	MPI	高校生男女120名	バレーボール	4 エースアタッカー, ライトアタッカー, センタープレイヤー, セッター	セッターが外向的	統計検定なし
丹羽・牧垣・長沢(1986)	Y-G性格検査	高校生大学生一般人 男女707名	卓球	3 <sup>8)</sup> 前陣型, ドライブ主戦型, カット型	ドライブ主戦型は前陣型よりG(一般的活動性)が高く, I(劣等感)が低い	分散分析ではなく検定
坂井・柳原(1980)	改訂版TSPI <sup>6)</sup>	高校生139名 (おそらく男子のみ)	サッカー	4 ゴールキーパー, ディフェンダー, ミッドフィールダー, フォワード	フォワードはMa(活発尺度)が高く, A(付加尺度)が低い フォワード以外は似た傾向	統計検定なし
武藤・薙野・横内・明石・畠山・山田・平田・佐々木(1971)	TPI <sup>7)</sup>	高校生女子495名	ソフトボール	4 投手, 捕手, 内野手, 外野手	Dp(自分の内面を気にする傾向)は内野手と外野手が高く, 投手と捕手は低い	統計検定なし

<sup>1)</sup> エゴグラム(Egozram): 5つの自我状態(批判的な親CP, 養護的な親NP, 大人A, 自由な子どもFC, 順応した子どもAC)を測定する。  
<sup>2)</sup> アイゼンク性格検査(Eysenck factorial multidimensional personality questionnaire): 外向性, 神経症傾向, 精神病傾向の3側面を測定する。  
<sup>3)</sup> DIPCA.3(Diagnostic Inventory of Psychological-Competitive Ability for Athletes; 心理的競技能力診断検査): スポーツ選手の一般的な心理傾向としての心理的競技能力を12の内容(忍耐力, 闘争心, 自己実現意欲, 勝利意欲, 自己コントロール, リラックス, 集中力, 自信, 決断力, 予測力, 判断力, 協調性)に分けて診断する。DIPCA.1は改定前の版であるが同様に12の内容から構成されている。ただし, 自己実現意欲は自己実現, 勝利意欲は勝利志向性と命名されている。  
<sup>4)</sup> Y-G性格検査(Yatabe-Guilford Personality Inventory): 12の下位尺度(抑うつ性D, 回帰性傾向C, 劣等感I, 神経質N, 客観性のないことO, 協調性のないことCo, 攻撃性Ag, 一般的活動性G, のんきさR, 思考的外向T, 支配性A, 社会的外向S)を測定する。  
<sup>5)</sup> MPI(Maudsley Personality Inventory): 向性と神経症的傾向の2つを測定する。  
<sup>6)</sup> 改訂版TSPI(日本体育協会スポーツ科学研究委員会人格目録): 9の下位尺度(見せかけ尺度L, とらわれ尺度Hs, 気が重い尺度D, むら気尺度Hy, 不安観尺度Pt, 活発尺度Ma, 打ち解けない尺度St, 引っ込み思案尺度Do, 付加尺度A, 無答数?)を測定する。  
<sup>7)</sup> TPI(Todai Personality Inventory; 東大版統合人格目録): 10の基本尺度(Dp, Hc, Hy, Ob, Pa, Hb, As, Ep, Na, In)を測定する。総合的な性格特性や精神症状, 不適応行動, 神経症傾向を測定する際に用いられる。  
<sup>8)</sup> 丹羽ら(1986)が対象としたのはポジションではなく戦型であるが, 戦型の選択はポジションの選択と同様に選手あるいは指導員が行っていたことからここで併記する。

て尺度を選択すればよいと考えられる。また対象者は男女の一方の場合と男女両方の場合があるが, 性格検査では男女差が報告されていることが多い(e.g., 齊藤・中村・遠藤・横山, 2001; 丹羽・牧垣・長沢, 1986)。そのため研究計画の立案および分析にあたっては一方の性別に対象を絞るか, 影響を相殺させるか, 性別を要因に組み込むことが望ましいであろう。そして種目だが, ポジションは競技種目に依存するため, ポジションの性格特性を検討する上では杉山(1997)のように場面をニュートラルに設定するか, 他の研究のように種目を特定する必要がある。そこで, 本稿では筆者らが所属する大学の部活で高い競技レベルを保持するフィールドホッケーを種目に取り上げ, ポジションと性格特性との関連を検討したい。フィールドホッケーでは「全員守備・全員攻撃」という方針が提案されており, そうしたなかでポジションで性格特性に差異が見られるか否かも興味深い。

## フィールドホッケーとそのポジション

フィールドホッケーは先端の曲がったスティックと硬球を使い, 2チームが芝の上で相手ゴールに向けて1つのボールを互いに打ち込もうと競い合うスポーツである。

ゴールキーパー(以下, GK)が1名とフィールドプレイヤーと総称されるディフェンダー(DF), ミッドフィールダー(MF), フォワード(FW)が10名の計11名が試合に出場する。ポジションはこの4つに大別でき, FWは攻撃を主として得点シーンに絡む。MFは基本的には攻撃を主とするが, 中盤でパスをつないでFWにボールを運び, 時にはFWと同様に得点シーンに絡む。DFは守備を主とし相手のFWをマークする(相手の動きについて相手チーム間でのボール運びの中で相手にパスされてきたボールを取る)。GKは最後の守護者としてGKに限り使用される防具を身につけ, 全身を使ってゴールを守備する。ポジションは選手の希望や監督の判断で決定される。

## 目的

フィールドホッケー部員を対象に, ポジションおよび性別で性格特性が異なるかを検討することを目的とする。

## 方法

### 参加者および調査時期

関東, 東海, 関西にある11大学でフィールドホッケー

部に所属する大学生男女を対象にした。国内大学に関してフィールドホッケーの全国大会シーズンであった2016年9月中旬から11月中旬にかけて、各大学の代表者を通じて調査は依頼した。回答は任意かつ匿名であり、154名（男性66名、女性88名）から有効回答を得た。

### 質問紙

**ポジション**：現在のポジションと希望するポジションをそれぞれGK、DF、MF、FWから一つ選択させた。

**Big Five 尺度**：性格特性を測定するために性格特性用語を用いたBig Five尺度（和田, 1996）を用いた。この尺度は、外向性、神経症傾向、開放性、調和性、誠実性の5因子を想定して各12項目の全60項目から構成された。「飽きっぽい」などの性格特性用語に対して、非常に当てはまらない(1)、あまり当てはまらない(2)、どちらでもない(3)、わりと当てはまる(4)、非常に当てはまる(5)の5件法で自分に最も当てはまると思う番号に回答させた。各因子を構成する項目の平均値を下位尺度得点にした。

性格特性の測定にあたりBig Five尺度を用いた主たる理由は、(1)1980年代に5つの性格特性が複数報告されて以降Big Fiveは現在の特性論の主流である仮説であること、(2)Y-G性格検査やTPIに比べて因子数が少ないため回答者の負担を抑えやすく、総合的な性格特性を把握しつつも解釈が平易であることであった。なお性格特性用語を用いたBig Five尺度については5件法と7件法と評定ポイント数が異なっても同様の5因子構造が安定して得られることが報告されていた（和田, 1996）。

そのため回答者の負担軽減の観点から本稿では5件法を採用した。

## 結果

### 因子の確認と全体の傾向

性格特性の5因子について内的整合性を確認するために各因子でCronbachの $\alpha$ 係数を算出した。因子間相関とあわせて表2に示す。Cronbachの $\alpha$ 係数は5因子いずれも.70以上と比較的高い値であったことから内的整合性が確認された。因子間相関については外向性と開放性間の正の相関がもっとも強い相関が見られ、外向性と神経症傾向間にも同程度の強さで負の相関が見られた。他の因子間にも有意な相関がいくつか見られたが、誠実性は他の因子と有意な相関は見られなかった。

全体の傾向を把握するために各下位尺度得点の平均と標準偏差を算出した。4大学の大学生男女925名の回答（斎藤ら, 2001）を参考値として表3にあわせて示す。1サンプルのt検定の結果、本稿の値は斎藤ら(2001)に比べて外向性と誠実性が高いことが示された。

### ポジション別および性別の性格特性

「現在のポジションでの性格特性」と「当該ポジションを希望する人の性格特性」についてその類似点および相違点を明らかにするため、現在のポジションと希望するポジションにわけて分析した。現在のポジションと希望するポジションの人数内訳は表4に示す。

表2 Cronbachの $\alpha$ 係数と因子間相関

	外向性	神経症傾向	開放性	誠実性	調和性
外向性 ( $\alpha = .884$ )	—	-.510 ***	.519 ***	-.102	.298 ***
神経症傾向 ( $\alpha = .894$ )	—	—	-.263 ***	.055	-.260 **
開放性 ( $\alpha = .723$ )	—	—	—	-.065	.157
誠実性 ( $\alpha = .722$ )	—	—	—	—	-.357 ***
調和性 ( $\alpha = .875$ )	—	—	—	—	—

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

表3 下位尺度得点の平均値<sup>注2</sup>

	本稿			齊藤ら(2001)		
	女性	男性	全体	女性	男性	全体
外向性	3.6 (0.7) **	3.5 (0.8) ***	3.6 (0.7) ***	3.4	3.1	3.3
精神症傾向	3.1 (0.8)	3.1 (0.8)	3.1 (0.8) **	3.3	3.3	3.3
開放性	3.1 (0.6) ***	3.1 (0.6)	3.1 (0.5) *	2.9	3.2	3.0
誠実性	2.9 (0.5) ***	3.0 (0.5) ***	3.0 (0.5) ***	2.6	2.5	2.5
調和性	3.3 (0.8)	3.0 (0.8)	3.4 (0.7)	3.4	3.4	3.4

( ) はSD

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

## フィールドホッケー部員のポジションと性格特性

**現在のポジション**：現在のポジション別の性格特性を把握するため、ポジション別および性別に各下位尺度得点の平均値と標準偏差を図1から図5に示した（図内の誤差棒は標準偏差）。また各下位尺度得点を従属変数に、ポジション（参加者間要因4水準）と性別（参加者間要因2水準）を独立変数にして2要因分散分析を行った。その結果、外向性、神経症傾向、開放性、調和性では交互作用と主効果ともに有意差は見られず、誠実性においてのみポジションに有意な主効果が見られ（ $F(3,146) = 2.87, p < .05$ ）、多重比較からMFはFWに比べて誠実性が高いことが示された（ $p < .01$ ）。

**希望するポジション**：希望するポジション別の性格特性を把握するため、ポジション別および性別に各下位尺度得点の平均値と標準偏差を表5に示した。また各下位尺度得点を従属変数に、ポジション（参加者間要因4水準）と性別（参加者間要因2水準）を独立変数にして2要因

表4 人数の内訳

	女性		男性		全体	
	現在	希望	現在	希望	現在	希望
GK	19	14	15	11	34	25
DF	23	22	19	16	42	38
MF	21	19	17	16	38	35
FW	25	30	15	22	40	52

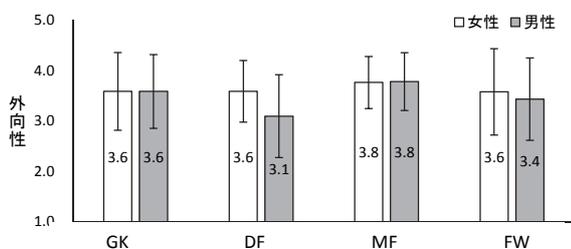


図1 外向性（現在のポジション）

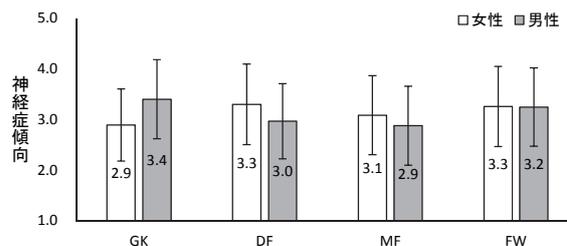


図2 神経症傾向（現在のポジション）

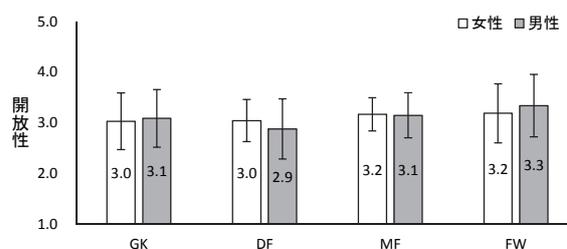


図3 開放性（現在のポジション）

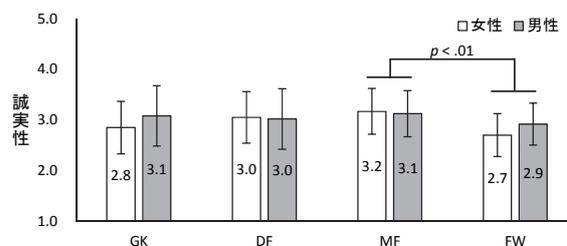


図4 誠実性（現在のポジション）

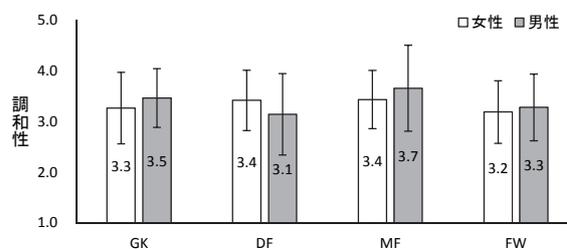


図5 調和性（現在のポジション）

表5 希望するポジションの下位尺度得点の平均値

	GK		DF		MF		FW	
	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性
外向性	3.7 (0.8)	3.6 (0.7)	3.6 (0.7)	3.2 (0.7)	3.8 (0.6)	3.8 (0.6)	3.5 (0.8)	3.3 (0.9)
神経症傾向	2.6 (0.8)	3.3 (1.0)	3.3 (0.7)	3.3 (0.6)	3.1 (0.9)	2.6 (0.7)	3.3 (0.7)	3.2 (0.8)
開放性	3.0 (0.6)	3.1 (0.6)	2.9 (0.5)	3.1 (0.6)	3.2 (0.2)	3.1 (0.4)	3.2 (0.5)	3.1 (0.7)
誠実性	2.8 (0.5)	3.1 (0.8)	3.0 (0.6)	3.1 (0.5)	2.9 (0.4)	3.0 (0.4)	2.9 (0.4)	3.0 (0.5)
調和性	3.4 (0.7)	3.7 (0.5)	3.5 (0.7)	3.1 (0.8)	3.3 (0.5)	3.6 (0.7)	3.2 (0.6)	3.2 (0.8)

( )内はSD

分散分析を行った。その結果、外向性、開放性、誠実性、調和性では交互作用と主効果ともに有意差は見られず、神経症傾向においてのみ有意な交互作用が見られ ( $F(3,146) = 2.96, p < .05$ )、希望するポジションが GK おいては女性が男性よりも神経症傾向が低いことが示された ( $p < .05$ )。

## 考察

### 因子の確認と全体の傾向

外向性と開放性間の相関に最も強い正の相関が示されたことは和田(1996)と同様であった。本稿のデータでは外向性と神経症傾向間の負の相関が同程度に高く、これら以外にも有意な相関が見られたが、いずれも正負の向きは和田(1996)と同様で因子間の関係は分析にあまり支障はないと考えられた。

下位尺度得点は齊藤ら(2001)に比較して本稿のデータでは外向性と誠実性が高いことが示された。アスリートは外向的な傾向があることが指摘されている (Eysenck, Nias & Cox, 1982)。また、誠実性の高さは競技パフォーマンスの高さとの関連が指摘されている (Mirzaei, Nikbakhsh, & Shariffar, 2013)。大会参加しているフィールドホッケー部員である本稿の参加者において外向性と誠実性に高い値が示されたことは Eysenck et al (1982)や Mirzaei et al(2013)の結果を支持するものであったといえる。

### ポジション別および性別の性格特性

現在のポジションでは MF は FW に比べて誠実性が高いことが示された。誠実性は、個人の内なる誠実さ、つまりまじめさ、意志力といったものを指しており、勤勉性に近い (和田, 1996)。MF は基本的には攻撃を主とするが、中盤でパスをつないで FW にボールを運び、時には FW と同様に得点シーンに絡むため、大局的観点を持って己を律しバランスをとることが求められる。本稿の調査は大会シーズンに行った。すなわち現在のポジションを一定期間は担っており、それが第三者的に見て当該ポジションをある程度はうまくこなしていたと見なすことができる。そのため、MF に向いている性格特性の一つに誠実性の高さが挙げられる可能性が考えられた。

一方、希望するポジションでは GK においては女性が男性よりも神経症傾向が低いことが示された。一般に神経症傾向は男女に差があまりないことが指摘されている (e.g., 齊藤ら, 2001; Costa, Terracciano, & McCrae, 2001)。そうしたなかで希望するポジションにおいて女

性は神経症傾向が低いと示されたことは特徴的である。また有意差が示されたのは希望するポジションのみであったが、女性の GK は現在のポジションでも希望するポジションでも神経症傾向が4つのポジションの中では低く、女性 GK は神経症傾向の低さにおいて現在のポジションと希望するポジションで類似していた。女性で GK を希望するあるいは担っている者の性格特性の一つに神経症傾向の低さが挙げられる可能性が考えられた。フィールドホッケーでは「全員守備・全員攻撃」という方針が提案されているが、そうしたなかであってもポジションで性格特性に差異が見られた点は興味深い。

本稿では現在のポジションだけでなく希望するポジションを分析することでこれまであまり着目されていなかった当該ポジションを希望する人の性格特性を把握することもできた。しかし、現在のポジションと希望するポジションが一致している者と一致しない者にわけた分析は行わなかった。これは本稿のデータでは現在のポジションと希望するポジションが一致しない者が少なかったためである<sup>注3</sup>。これはポジション決めがチームと選手の双方にとって奏功していたといえるが、部活動にうまく取り組む上で介入が必要となるのは、現在のポジションと希望するポジションが一致しない者であろう。現在のポジションと希望するポジションが一致しない者については、事例的に取り組むことで適応するまでの過程や適応できない場合の要因を掘り下げていくことなどが今後必要である。また、本稿ではフィールドホッケーを対象にポジションと性格特性との関連を検討したが、ポジションと性格特性との関連は研究により結果が一貫していないため、今回得られた知見を含めてこれまでの知見を統合していく必要がある。

## 結論

本稿はフィールドホッケー部員を対象に、ポジションおよび性別で性格特性が異なるかを検討することを目的にした。まず部員は大学生一般と比較して5つの性格特性のうち外向性と誠実性の高さが特徴的であることが示唆された。そして現在のポジションと希望するポジションでそれぞれ検討したところ、現在のポジションと希望するポジションで大きな差異は見られなかったが、現在のポジションの結果から特に MF に向いている性格特性の一つに誠実性の高さが挙げられる可能性が考えられた。また、希望するポジションと現在のポジションの結果から、女性で GK に向いている性格特性の一つに神経症傾

向の低さが挙げられる可能性が考えられた。競技種目が多岐にわたるスポーツ心理学の領域のなかで、本稿はフィールドホッケー部員を対象にポジションと性格特性との関連を検討することができた。

## 謝辞

本調査にご協力頂いた皆さまにこの場をかりて改めて御礼を申し上げます。

## 注

注1：本稿は第2著者が2016年度に東海学院大学人間関係学部心理学科に提出した卒業論文を、第1著者が再分析し全面的に改稿したものである。

注2：齊藤ら(2001)は7件法で実施して各因子を構成する項目の合計値を下位尺度得点としていたため、表3では5件法で平均値に換算した値を示した。

注3：一致が103名で不一致が51名であった。ポジションの組合せ別や性別を加味するとサンプルサイズが一桁になったため分析は割愛した。

## 引用文献

- Cavala, M., Trninic, V., Jasic, D., & Tomljanovic, M. (2013). The influence of somatotype components and personality traits on the plying position and the quality of top Croatian female cadet handball players. *Collegium Antropologicum*, 37, 93-100.
- Costa, T. P. Jr., Terracciano, A., & McCrae, R. R. (2001). Gender differences in personality traits across cultures: Robust and surprising findings. *Journal of Personality and Social Psychology*, 81(2), 322-331.
- Eysenck, H. J., Nias, D. K. B., & Cox, D. N. (1982). Sport and personality. *Advances in Behaviour Research and Therapy*, 4, 1-56.
- 藤谷博人・谷田部かなか・関 久子・河野照茂・青木治人 (2005). アメリカンフットボールにおける各ポジションの性格特性について 体力科学, 54(6), 692.
- Garland, D. J., & Barry, J. R. (1990). Personality and leader behaviors in collegiate football: A multidimensional approach to performance. *Journal of research in personality*, 24, 355-370.
- 川上 哲・高橋宗良・榎本 至・下川哲徳 (2009). 水球男子ジュニア選手における心理的競技能力について—ポジ

ョン別心理的競技能力の特性— 杏林大学研究報告教養部門, 26, 23-28.

牧垣純子・丹羽劭昭・長沢邦子 (1982). スポーツ参加婦人のパーソナリティ・テニス・卓球・バレーボール参加者を中心に— 日本体育学会大会号, 33, 218.

丸山章子・井篁 敬 (2014). 陸上競技選手の心理的競技能力に関する研究 金沢学院大学紀要 経営・経済・情報・自然科学編, 12, 159-165.

Mirzaei, A., Nikbakhsh, R., & Sharififar F. (2013). The relationship between personality traits and sport performance. *European Journal of Experimental Biology*, 3(3), 439-442.

武藤幸政・薙野邦彦・横内靖典・明石正知・畠山栄一・山田栄子 (1971). ソフトボールのポジション別性格特性について(第2報)—高校女子について— 日本体育学会大会号, 22, 478.

西村栄蔵・田中啓之 (1986). バレーボール選手のポジション別の心理的適性に関する研究 広島経済大学研究論集, 9(3), 101-112.

丹羽劭昭・牧垣純子・長沢邦子 (1986). 卓球選手のパーソナリティの検討—対象者別・戦型別比較を中心に— スポーツ教育学研究, 6(2), 25-37.

大久保純一郎・永野希美子 (2014). 女子バレーボール選手における人格特性とメンタルヘルスの関係—エゴグラムとポジションに着目して— 帝塚山大学心理学部紀要, 3, 11-17.

齊藤崇子・中村知靖・遠藤利彦・横山まどか (2001). 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の標準化 九州大学心理学研究, 2, 135-144.

坂井 学・柳原英児 (1980). サッカー選手のポジション別性格特性について 日本体育学会大会号, 31, 674.

Schurr, K. T., Asley, M.A., & Joy, K. L. (1977). A multivariate analysis of male athlete personality characteristics: Sport type and success. *Multivariate Experimental Clinical Research*, 3(2), 53-68.

杉山佳生 (1997). ポジションに対する認知とパーソナリティ, 注意スタイルとの関係 日本体育学会大会号, 48, 213.

徳永幹雄 (2004). スポーツ心理学の研究とは 日本スポーツ心理学会(編) 最新スポーツ心理学—その軌跡と展望 大修館書店, 9-16.

徳永幹雄・橋本公雄・高柳茂美・許斐 健 (1994). スポーツ

選手の心理的競技能力の「特性」および「状態」に関する研究—準硬式野球大会参加選手について— 健康科学 (九州大学) , 16, 65-73.

和田さゆり (1996). 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成 心理学研究, 67(1), 61-67.

## Position and Personality Traits of the Field Hockey Club Players

Yuko Adachi, Ayako Miyauchi

### Abstract

This study proposed to examine whether the personality differed by position and sex in field hockey. Four positions were taken; goalkeeper (GK), defense (DF), midfielder (MF), and forward (FW). Personality were measured by Big Five scale (Wada, 1996); extraversion, neuroticism, openness, conscientiousness, and agreeableness. One hundred and fifty four students belonging to the field hockey club at 11 universities effectively answered the questionnaire during period of universities tournament. We asked the current position and the desired position and examined each. As a result, subjects showed high scores with extraversion and conscientiousness compared with general university students. Regarding the current position, it was shown that extraversion, neuroticism, openness, agreeableness were not different depending on position, and conscientiousness was different; MF was higher than FW. For the desired position, neuroticism was shown that in GK females was lower than male. These results suggested possibilities that high conscientiousness may be one of the feature of personality that suitable for MF and in female, low neurosis may be one of the feature of personality that suitable for GK.

Keywords: Personality, Position, Field Hockey